

ニッポン人脈記

4/3刊行、1面

jinmyaku@asahi.com

日本銀行の総裁は、通販の価値を守る番人である。物価がある程度の上昇、逆のデフレのときは金利を下げる。

世間では、89年の暮れ、日銀の総裁に三重野康(84)がつづく。少年時代を日清が過ごし、東京にてお預けで行商をした苦勞人。総裁に就任して最初の行内報に「逃げたな」とかんだ。

そして、三重野は矢継ぎ早に金利を上げた。庶民が都心に住めなくなつた元凶、地価高騰を退治する政策に、「平成の鬼平」ことわれた。

三重野の策で、バブルは確かに沈黙化した。しかし、不良債権の出が残り、不況と金融危機がやつてくる。

金利を上げれば政治家が「景気が悪くなる」と怒り、下がらる預金者が「利息を減らす気か」といふらむ。何をしてか文句を言われるから、日銀総裁は、果敢に決めてせざらに。

三重野の後は大蔵省出身の松下康雄(82)、そして98年春、速水優(83)が就任した。兄弟の6番目として神戸に生まれた。戦中、戦後に父や兄をして家族の大黒柱になり、「うぶれない日銀」に入った。日商岩井に出ていたが、17歳ぶりに東京へ呼び戻された。

速水日銀の5年間は、バブル崩壊の後始末が最大の仕事だった。そのため「禁じ手」を連発した。正義は98年9月、民間

品川正治さん



銀行から株を買取る表明。
株価を下支えした。

当時、平均株価は1万円を割り込んでいた。民間銀行は、預金を元手に取引の株を大量に買い、持ち続ける。株価がさらによがれば、太字でつぶれる銀行がでてしまつた。

でも、日銀が買った株が下がれば自分の財務が傷つく。おそれを飛行する日銀の経営がおかしくなれば、「巴」の信用が揺らぎかねない。しかし速水は決めた。「銀行がひきかねたら、『何をやつてやった』といわれる」

デフレとの格闘では、銀行もうつの資本借りて金利をゼロにするより、出回るお金を超過するようにした。借金には金利がつくという常識から離れてならない、ゼロ金利政策である。

政府・自民党の強い反対の中、金利引き上げと踏み切ったところから、クリスマスの母に運ばれて日慶学舎に通つた。

総裁室の奥の部屋に、速水は二つの掛け軸をかけた。「平安

は世にある」「飛れるが、わたしあなたが共にいる」。イザヤ書の中にある言葉だ。難しい判断を迫られたJINの二言を中心を持って対応したところ。

政府や経済界と意見をぶつけた財界の長老、品川正治(88)は速水を陰で支えたひとり。著者

や日銀OBを招いた会合を開き、世間の評判を耳に入れた。2人は同郷で長い付き合いだ。

速水は5年間に450回、国会に呼ばれ、政策を問われた。こぼす速水は、品川は「そんなに呼ぶ必要があるのか、と政府に言つべきだ」と助言した。

品川の会合には、速水の次の総裁、福井俊彦(72)も参加していった。接続活動の管理責任をこつて副総裁をやめ、富士通総研に転じていた。

福井は03年3月、速水から総裁を継ぐと、すぐに一段の金融緩和に乗り出した。緩和を歓迎する政府の受け止めますで、「世界最優秀の中央銀行総裁」と市場をうならせた。勢いに乗つて、06年春には超金融緩和策を終わらせた。政界から強く拒否はなかつた。

だが、村上アンドリュードラゴンが資金を出していたことが発覚。副総裁の武藤敏郎(68)が官邸などを回って政界からの批判を抑えたものの、「政権に守られた総裁」とのイメージがつく。「清貧」で通つていた福井について悔やみきれない痛恨事だった。

福井は先月19日、日銀を去つた。政治に漠然とした態度をとるべき経験。その座が、政治迷走のひびつちりで空席のままである。

(織田一)

II 文中敬称略

マネー回流④

逃げず決断

速水豊さん
日銀本店



三重野康さん

